

⑦ コミュニティカフェ ～「つながり」で想いがカタチになる居場所～

1 はじめに

経済や社会環境の変化により、人と人・地域との「つながり」の気薄化が問題視される中、近年、「コミュニティカフェ」を通じて「つながり」を形成しようという取り組みが各地で進められている。

コミュニティカフェに関する明確な定義はないが、多様な人々が自由に集い、そこで語られる想いが行動(カタチ)へと具現化できる居場所であり、その運営にビジネスの手法を用いることで、自立的かつ継続的な運営が成されていることが望ましい。

ビジネスの手法を用いる場合、コミュニティカフェは、「地域住民が主体となり、地域課題に対し、地域の資源(ヒト・モノ・カネ・ノウハウ等)を活用し、ビジネスの手法を用いて解決する仕組み」として定義づけられている「コミュニティビジネス」の1つとして捉えることができる。

今回、地元商店街や団体等との連携により誕生した2つのコミュニティカフェを紹介

したい。カフェが単なる情報交換の交流の場にとどまらず、人や地域とのつながりを契機に、想いを具現化できる場として、複合的な機能を有していることに注目していただきたい。

2 進的モデルを築いた港南台タウンカフェ

港南台駅近くに開設されている「港南台タウンカフェ」には、温かみのある地元神奈川の県産材を利用した小箱ショップ、ギャラリィ、交流スペース、情報コーナー等が併設されている(写真1)。

港南台タウンカフェの運営者の1人である株式会社イータウン・代表取締役の斉藤保氏に話を聞いた。

① 転居地・横浜での生活を楽しみたい

富山県出身の斉藤氏が横浜市に転居したのが、1998年。日々の生活の中で、地域住民との関係の希薄化を感じ、「横浜での生活を楽しみたい」

という想いで、インターネットで地域情報の掲示板を立ち上げたところ、予想以上に多くの人から反響があった。

② 顔の見える場をつくりたい

ネットでの情報交換を続ける中で、ネットの有益性も感じながらも、「顔の見える場をつくりたい」という想いが日増しに強くなっていった。その頃より市民活動団体の勉強会に参加し、市民の場づくりを行うための会合やイベント等にかかわることで地域とのつながりが徐々に深まり、商店会の空き店舗を活用した「港南台タウンカフェ」の開設に携わることとなった。

③「cater」から始まる「まちづくり」をミッションに

2005年10月に開設されたカフェは「cater」から始まる「まちづくり」をミッションに、(1)横浜港南台商店会、(2)市民活動団体・まちづくりフォーラム港南、(3)斉藤氏が代表を務める株式会社イータウンの3者で共同運営されている。主な事業内容は、(1)カフェ

サロンの運営、(2)情報誌・ネットによる地域情報の発信、(3)地域交流イベントの企画・運営等。これらの事業内容は、各々が切り離された事業ではなく、全てが密接にリンクして成り立っている。

④ 安定的な収益をあげる仕組み・小箱ショップ

カフェの特徴の1つが、自立的かつ継続的な運営を支えてきた「小箱ショップ」である。カフェ内には、約100棚の「小箱」レンタルボックスが設置され、地域住民がボックスオーナーとなり、手作りの個性溢れるバッグ、小物、アクセサリー等の約3,000点の商品が並んでいる(写真2)。

ボックスオーナーは、利用料(2,500円/6,000円/月)と販売手数料を支払うことで誰もが利用でき、出店者の9割が地域住民で、地域の福祉作業所や企業の出店もある。小箱ショップは、カフェの全体収入の6割を占め、カフェの運営を支える大きな収入源となっている。

執筆

高山 現人
経済局経営・創業支援課

写真1 港南台タウンカフェ



写真2 小箱ショップ



「公園遊び会」という活動からスタートさせ、その後、活動が広がり、2006年には札幌市と協定を結び、旭山市民活動協議会を発足するまでに至った。その頃より、「拠点があれば、さらに活動の幅が広がるのではないか」という想いが募っていった。

②地道な活動の広がりが縁で、事業が拡大

2007年、横浜に戻り、未就児童向けの「公園あそびの会」や、母親向けの絵本読み聞かせ講座、アロマ講座等を実施。

2009年には、「大倉山文化村」というグループを構成し、「交流」、「企画」、「夢プロジェクト」をコンセプトに、コンサートやセミナー等、活動を拡大。活動にあたり、区役所の助成金補助を受けていたため、定期的な報告（プレゼン）が必要であった。当初、煩雑さを感じていたこの報告の場が、現在、イベント等を共同開催している地元の子育て支援団体とも知り合うきっかけとなり、鈴木氏らの活動が地域住民や団体に周知されていく機会となっていた。

このような着実な活動範囲の拡大を経て、人脈が広がってきた時に、前述の港南台タ

ウンカフェの斉藤氏から、「商店街の空き店舗でアンテナショップをやってみないか？」との話が持ち込まれた。

③地元商店街と建設業協会との連携事業により誕生

街カフェ・大倉山ミエルは、社団法人横浜市商店街総連合会と社団法人横浜建設業協会が連携して、商店街・建設業・地域の活性化を目指す「ヨコハマ商建連携事業の大倉山プロジェクト」の一環で開設され、建設業協会が内装工事等のインシヤルコストの一部を負担している。

また、ヨコハマ商建連携事業が行っている養蜂プロジェクトで収穫した横浜産はちみつを提供するアンテナショップという位置づけも有している。

④連携による地域に根ざした商品づくり

大倉山ミエルは、主に子育て中の母親を対象として、(1)飲食事業、(2)ボックスショップ事業、(3)イベント（教室）事業を中心に運営している。

港南台タウンカフェ同様、ボックスショップ事業で収益確保を目指す他、ミエルの特長の1つは、「地域に根ざした飲食提供」である。ミエルの

店舗はもともと飲食店の空き物件のため、厨房スペースを有効活用している。「ミエル」とはフランス語で「はちみつ」を意味し、前述③の養蜂プロジェクトで採取された横浜産はちみつや、地元の食材を使った料理（写真5）が提供されるなど、地域に根ざした商品開発を心がけている。食材の中には、建設業協会の会員企業が新規事業で取り組んでいる植物工場で栽培された葉物野菜も取り入れられている。

このように生産者の分かる地元食材を提供することは、震災後、原発問題の不安から、食の安全・安心に関心の高い母親のニーズ（社会課題）に即したサービスの提供にもなっている。

⑤過去の活動の経験が事業の基盤に

カフェ内で開催される講座やワークショップの他、周辺の公園や森を使った「お遊び会」（写真6）も開催している。札幌時代からの公園活動で蓄積された経験・ノウハウが現在の事業に引き継がれ、子供から大人までが地域（まち）で生活する楽しみ・喜びを感じられる事業構成となっている。

参加者である地域住民が、

楽しみ・喜びを感じ、さらに住み良い地域（まち）にするには何が必要かと考え、新たな活動へと結びついていくのであろう。

⑥社会起業家創出プログラムを通じた人脈形成

鈴木氏は2010年、内閣府事業で実施された「社会起業家創出プログラム（3ヶ月）」を受講している。ビジネスコンペを通過し、資金援助を受けるとともに、プログラムの同級生らとの「つながり」を活かした事業も展開し始めている。

地域や社会課題に取組もうという志を持つ社会起業家らの同級生がミエルに集い、互いの事業分野（女性の働き方支援、音楽を通じた子育て支援等）を持ちより、共同イベント等の実施に向けて検討を進めている。

⑦もっと地域のことを知りたい、そんな想いを持つ人たちの受け皿に

前述⑥の同級生の望月氏は言う。「鈴木さんは、市民活動の豊富な経験があり、自分たちにとっては、良き先輩。ミエルという居場所が存在すること、互いに集まり、想いを語り合うことができる」と。

写真6 お遊び会



写真5 地元食材を使った料理



またミエルのボックスオーナーであり、スタッフでもある奥津氏は、「大倉山に住んで18年になるが、地域との関わりがあまりなく、もっと地域のことを知りたい」と感じていた時、ミエルの話を知ったとのこと。

ミエルは、地域の役に立ちたい、地域と関わりたい住民の想いの受け皿となりつつある。

③新たな企業とのアライアンスも形成

開設2年目の2011年秋からは、共同運営者である商店会、建設業協会以外の新たな企業とも連携を築いている。地元の大手不動産会社のマンションのモデルルームを利用し、ミエル企画のセミナー（例・エコ料理セミナー・写真7）を開催している。大倉山在住のシニア層は、自分の子供世帯との将来の同居先を検討する際、現在、住み慣れている大倉山周辺で探す傾向があるため、不動産会社にとっては、モデルルームへの集客につながり、ミエルにとって、不動産会社からの受託費が収益確保につながり、互いに補完関係を築いている。

大倉山ミエルはまだ開設2

年目であり、鈴木氏の札幌市時代からの市民活動を基盤に徐々に事業を拡大させ、「つながりから、想いがカタチへと具現化」される仕組みの形成途上の段階である。

4 むすび

2例の事業の成長ステージは異なり、各代表者の開設経緯も異なるが、共通点も浮きび上がった。

①2例の共通点

■各代表者はともに、強い思い・信念のもとに、自ら行動におこした。リーダーの役割を担いつつ、人を巻き込む力を有するコーディネーターの役割も担っている。

■運営は、自立のかつ継続的な運営に向けた収益確保の仕組みを開発している。

■企業、団体等との連携を通じて、幅広い事業展開が構成されているが、全ては「人と人とのつながり」がきっかけである。

②SB/CBへの期待、コミュニティカフェ開設のポイント

2008年の「ソーシヤルビジネス研究会報告書（経済産業省）」では、2008～2

012年度をSB集中推進期間と位置づけ、（それぞれ2008年度比で）雇用規模…約3・2万人↓約30万人、市場規模…約2,400億円↓約2・2兆円という目標を設定し、各プログラムを遂行していくとしている。SB/CBは、今後の地域経済の活性化の担い手、雇用創出の担い手として大いに期待されている。さらに、「人・地域とのつながり」、「まちの再生」といった地域住民の精神的やすらぎ、心の豊かさへの期待も高い。

このような背景のもと、コミュニティカフェの開設希望者は増えているが、(1)「思い(社会性)」と「収益確保の仕組み(事業性)」とのバランスが保たれているか。(2)自立的な運営体制の中、カフェが人々の想いを吸い上げ、「カタチ」へと具現化できる複合的な機能を果たせるか、が重要である。

③居場所づくりへの強い信念、「つながり」から生まれる相乗効果

最後に、港南台タウンカフェの斉藤氏の印象的な言葉を紹介したい。

「これまで大変だったことは？と質問を受けることがある。大変だったことはあるかもしれないが、改めて振り返ると、具体的には思い出せない。困難があるからこそ、乗り越える楽しみがある。」

これが、港南台タウンカフェの継続運営の秘訣なのではないか。「困難は歓迎」と感じられる程の強い信念を持った人のもとに、連鎖的に新たな人が集い、つながりが形成され、想いの具現化に向け、意識の共有化が図られる。

カフェスペース自体は20坪と、限られた空間だが、そこに集う人々の「つながり」から紡ぎあげられる過程での「人の育ちあい／まちづくり」への相乗効果は無量大である。是非、今後も新たなコミュニティカフェが開設され、新たなつながりが形成されていくことを期待したい。

写真7 エコ料理セミナー

